

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	横山 美和 【ジェンダー学際研究専攻 平成18年度生】	要 旨
論文題目	女性医師 M. P. ジャコービーの月経成因論の一考察 —19 世紀後半米国における科学知のジェンダー・バイアスをめぐって—	<p>本論は、科学的、客観的真理とされている知識が、当該社会の価値に左右され、ジェンダーに関わる同時代の知として規定されるプロセスとその内実を明らかにすることを研究課題としている。具体的には、19 世紀後半米国における月経をめぐる論争を通じて、当時の「月経」に対するジェンダー・バイアスの様相と抵抗的な科学知の生成過程につき考察することを目的としている。</p> <p>主要な分析テキストとして取り上げるのは、ハーバード大学医学部教授であったエドワード・クラーク (Edward H. Clarke, 1820-1877 の著書『教育における性別、あるいは、女子のための公平な機会』(<i>Sex in Education or, A Fair Chance for Girls. 1873</i>) と女性医師メアリ・パトナム・ジャコービーの著書『月経中の安静に関する問題』(<i>The Question of Rest for Women during Menstruation. 1877</i>) である。</p> <p>第1章では、先行研究として月経成因説の歴史的展開を跡付け、本研究の視座として、栄養学史、理論負荷性・パラダイム論・言説論、フェミニズム科学論の成果を検討している。第2章では、19 世紀米国社会における女性医学教育の勃興と女性医師の登場を跡付け、ジャコービーの経歴が当時では先駆的であったことを明らかにしている。第3章では、プーシェ、ミシュレ、クラークらの月経観を「月経負荷説」として提示し、特に、クラークが「生理学」という科学に依拠して「女性は月経があるから、身体に負荷を負うので、その間の休息は不可欠であり、男性と同じ形態の中等・高等教育を受けるのは適切ではない」と主張したことの含意を分析した。第4章では、クラークの説に疑義を呈して大学卒業女性協会の行ったアンケート調査を取りあげ、女子高等教育を担う女性たちからの反駁の様相を紹介している。第5章では、ジャコービーは「栄養学」の観点から、月経は余剰に蓄積した(「付加」)の血液の排泄現象であり「負荷」ではないという月経成因論を論じると共に、米国の大学在籍中の院生や卒業生、女子労働者にも月経に関する独自のアンケート調査と実験による計測調査を行い、ほぼ半数の女性は、月経時に安静にする必要を感じておらず、月経痛の原因として、栄養状態や運動習慣、労働時間等との関係に注目する必要性を明らかにし、高名な医学賞を受賞したことを述べている。</p> <p>本論の研究上の貢献は、月経をめぐる論争を跡付けると同時に、ジャコービーが「月経付加的栄養説」「栄養の多寡変動説」という月経成因論を導きだし、19 世紀後半米国での、月経をめぐる科学知のジェンダー・バイアスと、それに抗する科学知の生成を行ったことを明らかにした点にある。</p>
審査委員	(主査) 教授 舘 かおる	
	准教授 森 義 仁	
	教授 小 玉 亮 子	
	准教授 斎 藤 悦 子	
	三重大学特任教授 小 川 眞里子	